

静岡県内の若者に献血を普及させるための方策に関する研究

静岡産業大学経営学部 葉口ゼミ (研究室)

指導教員：准教授 葉口英子

参加学生：伊藤大和、山下隼人、山本裕洋、若杉雄人

青島優也、田中勇吏、續木椋太、松田裕太

杉山瑠星、大軒颯人、安藤唯

1 要約

近年、少子高齢化の進展に伴い、輸血用血液を必要とする高齢者が増加する一方で、若者世代の献血者が減少している。静岡県においても平成27年度と平成17年とを比較すると10～30代の献血者数は3万51000人以上減少した。こうした若者の献血者の減少は日本の医療にも大きく関わる深刻な問題である。本研究は、本学の大学生を対象とした献血に対する意識・行動調査をおこない、若者の献血者減少の背景や原因を探ると同時に、どうすれば若年層の献血者を増加できるか、献血に対する理解を深めてもらえるか、といった問題について調査し、考察した。その結果、若年層において献血の重要性は十分に認識しているながらも、その意識が実際の献血行為へと結びつく情報や場所・機会が乏しいこと、また採血行為に関するネガティブな感情やイメージが払拭できていないこと、加えて、赤十字血液センターによる献血活動を推進するさまざまな広報活動や取り組みが十分に周知されていないことが明らかとなった。これらの結果を踏まえ、方策を考案した。最後に何よりも重要なのは、自分たちも静岡県内の若者の一人として、当事者意識を持ち続け、献血推進活動を今後も継続することである。

2 研究の目的

本研究は、若年層の献血者減少の背景や原因を探るため、静岡県内の大学生を対象とした献血に対する意識・行動調査をおこなった上で、どうすれば若年層の献血者を増加できるか、また、献血に対する理解を深めてもらえるか、という問題に対して有効な施策を考案し、その回答を地域への提言とすることを目的とする。

3 研究の内容

本研究の主な内容は、①献血に関する基本的理解と全国と静岡県にみる若年層の献血者の推移を確認し、減少の背景や原因を探る。②本学の献血活動の過去と現況を把握する。③静岡県赤十字血液センター浜松事業所にて献血に対する現状や理解を深める。献血活動の実際を知る。④本学の大学生を対象に、献血に対する意識・行動調査をおこなう。⑤静岡県西部でおこなわれている献血活動の現場の様子、学生ボランティアとして活動する若者に聞き取り調査をおこなう。⑥献血の理解を深め、若者の献血者増加をいかに進めるか、「献血活動の推進のあり方」、「意識の醸成」、「効果的な広報のあり方」の三点に焦点をあて考察した。⑦自分たちもキャンパス内で献血に対する説明や呼びかけするといった取り組みをする。以上の手続で、本研究を遂行した。

4 研究の成果

(1) 当初の計画

平成29年10月 静岡県在住の10代後半から20代前半の若者の献血状況についての下調べ。過去の資料の収集。
平成29年10月 本学のキャンパスでおこなわれている献血活動や現況に対し、担当者に聞き取り、打ち合わせをおこなう。協力機関となる県内の赤十字血液センターの照会。過去の資料を基にデータにまとめる。
平成29年10月 アンケート調査項目の選定（項目については、県及び静岡県赤十字血液センター等の関係機関へ意見を求める）。
平成29年11月 静岡県在住の10代後半から20代前半の若者の献血状況についてのアンケート実施。
平成29年12月 アンケートの集計、聞き取り調査。
平成30年1月 報告書作成。
平成30年2月 協力機関および関係者への報告。

(2) 実際の内容

平成29年10月 静岡県在住の若年層の若者の献血状況の下調べ。過去の資料の収集。(A予定通り)
平成29年10月17日 本学の献血状況について、静岡県赤十字血液センター浜松事業所から来られている担当者

に聞き取りをおこなう。(A 予定通り)

平成 29 年 10 月 協力くださる県内の赤十字血液センター事業所の選定について静岡県健康福祉部薬事課担当者と相談。平成 29 年 10 月 本学保健センターの担当者に本学における過去の献血に関する聞き取りと過去の資料を基にデータをまとめる。(A 予定通り)

平成 29 年 10 月 アンケート調査項目の選定をおこなう(項目については、静岡県健康福祉部薬事課担当者及び静岡県赤十字血液センター等の関係機関へ意見を求める)(A 予定通り)

平成 29 年 11 月 静岡県赤十字血液センター浜松事業所でのセミナー参加と事業所の見学。(B 一部修正 理由: 献血に対する理解や現場の様子を知るため)

平成 29 年 12 月 本学の学生を対象としたアンケート調査(190 名)を実施し、集計および分析をおこなうことで、献血に対する意識・行動を分析する。(A 予定通り)

平成 29 年 12 月 イオンモール市野で献血に関するボランティア活動の見学とインタビューの実施。(B 一部修正理由: 大型ショッピングモールでおこなわれている献血活動や学生ボランティア活動を知る必要があると判断した活動を追加したため。)

平成 30 年 1 月 報告書作成(A 予定通り)

平成 30 年 1 月 学内で献血活動に対する理解や呼びかけとしてチラシを配布するなどして取り組む(B 一部修正 理由: 実際のボランティア活動を実践する必要があると判断した活動を追加したため。)

平成 30 年 2 月 1 日 協力くださった赤十字血液センター浜松事業所にて報告会開催(A 予定通り)

(3) 実績・成果と課題

①現在、日本では 1 年間に約 488 万人(平成 27 年)の献血者がいる。しかし、この中で若年層の献血者は全国的に減少傾向にある。例えば、平成 21 年から平成 23 年における 10 代~30 代の献血者は減少し続けている(図 1)。2027 年には輸血が必要とされる血液が相当数不足することが危惧されている。今後、少子化で若者減少が進行する中、若者の献血者減少は益々深刻な問題となっている。

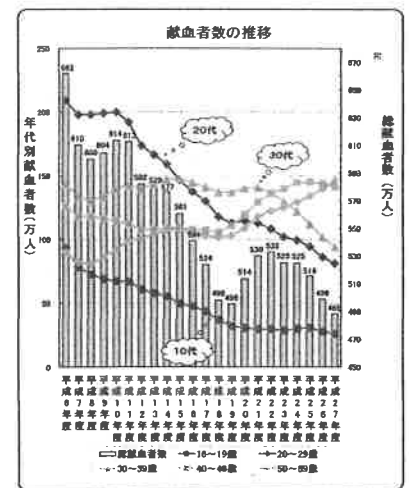


図 1 献血者数の推移(厚生労働省)

②静岡産業大学では年に 2 回「献血計画」として、静岡県赤十字センターより献血車が来校し、学内で献血活動がおこなわれている。平成 19 年から平成 29 年までの本学の献血者数を確認した。その結果、平成 24 年前後には 140 名いたが、平成 28 年は 90 名となり、ここ数年本学での献血者もかなり減少している(図 2)。こうした原因や背景を探るためにもアンケート調査で学生の献血をめぐる意識・行動調査をする必要があると考えた。また 10 月 17 日に本学でおこなわれた献血計画での様子(図 3)を見学すると同時に、献血担当者の方に聞き取りをおこなった。主な減少原因を伺うと「食券と記念品のプレゼントをなくしたこともあるのではないかとコメントいただいた。また「献血をおこなっていることをキャンパス内の学生に周知することの難しさを感じている」とのことであった。

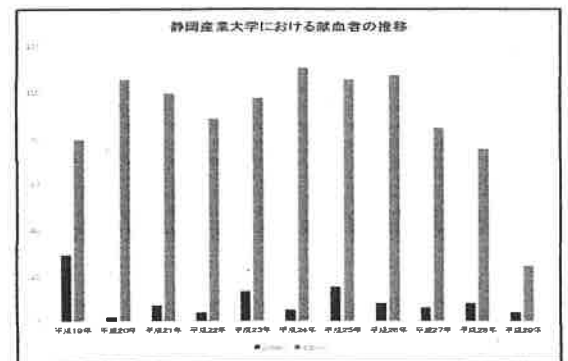


図 2 静岡産業大学経営学部の献血者数の推移

③静岡県赤十字血液センター浜松事業所を訪問し、セミナーをおこなっていただき、献血の重要性や基礎知識を学び、理解することができた(写真 1、2)。さらに若者の献血者を増やすためのアイデアや課題などについて、担当者の方に質問し答えていただいたり、意見交換するなど現場の貴重な話を伺うことができた。

図 3 本学における献血活動



写真 1,2 静岡県赤十字血液センター浜松事業所にて献血セミナー受講と質問、意見交換

④12月9日、イオンモール市野店での献血活動と学生ボランティアの様子に加え、学生達がどのような気持ちでボランティアを行っているか、インタビューによる調査をおこなった。その結果、ボランティアに取り組む学生たちは、若年層への献血を促す重要性を明確に認識しており、それぞれが自主的に考え、活動していることがわかった。セミナー等や献血の重要性を理解した私たちも、大変共感を持てる意見を多く聞くことができた。活動に従事する学生たちは「若者に献血への関心、興味をもってもらうため、若年層の方々に実際に学生ボランティアの方が訴えることが重要だ。それまで関心のなかった方でも自分と近い年の人がこうした活動に取り組んでいることを知ってもらい、それがきっかけとなり、献血への興味や関心に繋がる。」とのことだった。また「献血を行うことで救える命があり、それがやりがいになっている」と話し、「そのことを若年層の方に知ってもらいたい」と言っていた。これらの意見から、私たちも献血の重要性をしっかりと同年代に伝え、知ってもらう行動を起こす必要があると考え、そのためにはどのようなやり方が効果的か、ヒントを得た。



写真 3 ショッピングモールにおける献血活動と学生ボランティア

④静岡産業大学の学生アンケート（平成29年12月190名）の分析と考察をおこなった。以下主な項目についてのみ取り上げる。献血をしたことが「ある」は36%、「ない」が64%である。「献血したことがある人」について、その理由を問うと、「キャンパスに献血車がきていたから」69%、「家族・友人・先輩がしていたから」18%、「広報活動での必要性を知ったから」5%となった。結果、校内に献血車が来ていて、献血活動がおこなわれているといった身近な状況で献血しやすいタイミングが重要であるとわかった。一方、「献血したことがない人」の理由は、「機会（時間・場所）の不足」30%、「痛そう・怖い」38%、「他人がやっているから（自分がしなくてもよい）」8%、「その他」24%となった。つまり献血しやすい状況やタイミングも重要であるが、献血行為そのものに対するイメージ、例えば注射針を刺して血を採取することに対する「痛い」「怖い」といったイメージも献血者の減少に関連していることがわかった。

次に、「若者が献血をすることは重要だと考える」人は、約9割を占め、ほとんどの人が献血の重要性は認識できている。「献血に行こうと思えるタイミングや状況」は、「献血後にもらえる記念品が良ければ」と答えた人は72%であった。献血行為に見返りを求める人が7割はいることがわかる。次に「献血で救われた人の動画を見たり話を聞いたりしたことがある」は44%であった。私たちがセミナーで拝見した動画を見ることで、献血の重要性をさらに感じる事ができた。この割合が増加すれば、献血を身近に感じる人も増え、協力者も増加すると考える。「高校等の学校に献血車が来ていた」と答える人は93%にもものぼる。このタイミングを逃さず、献血の重要性、献血で救われた人の話などを聞いた後、すぐに献血ができる状況にあれば献血をする人は増えると考えた。献血活動に挙げられる問題として、「時間がかかってしまう事」や「やる機会がない」といった要因があることもアンケートから明らかとなった。

（4）今後の改善点や対策

本研究を通じて、そもそも献血とは何か、なぜ献血は必要か、といった基本的な知識や理解が若年層に十分に理解されていない点が献血者の減少の根本的な要因にあると考えた。当初は「献血を行ってもらおう」ことに重きをおいてアイデアを練ったが、途中から「献血の重要性」や「献血自体そのものを知ってもらえるにはどうした

らいいか」を考え、調査を進めていくことになった。また献血に関するアンケートの結果、献血が重要である認識は高いものの、無償で行う献血は、自ら意識を持って主体的に行うことであり、行動に移すには難しい点があることを痛感した。今回の調査結果から多くの課題や提案が出たものの、一番重要なのは、私たち若者自身が主体的に学び、行動し、取り組んでいかなければならないことを強く感じた。そのため今後は自分たちも静岡県の若者として当事者意識を持ち、学内外での献血ボランティア活動を推進し、友人・知人にその活動を紹介したり、広めたいと考える(写真4,5)。



5 地域への提言(活動および広報他に関する提言)

5-1 活動の推進

今回の研究を通じて得られた成果を主に以下の2点に集約した。まず、①地域で行われるイベントへの参加である。地域でスポーツ等のイベントに合わせて、会場内にて献血活動を行う。例えば、サッカー等のスポーツイベントに参加する人の年齢傾向は広いが、若者が多くいるため献血をする場所としてふさわしい。さらに、イベント時には多くの人を訪れるため、事後的に献血人数は増加する。特にイベントに来ている子どもたち、その親たちにも献血の大切さを伝える良い機会だと考える。次に、②地域企業へ献血のボランティア活動の呼びかけを一層推進する。例えば、静岡県内の企業と連携し、新卒の若者に対して、企業から働きかけをおこない献血をしてもらう。本人の善意で行われるケースが多数を占めている。社会人として意識の高まるタイミングで、社会貢献として企業側にも理解してもらい連携を促すことで、静岡県内の若者の献血参加率の上昇が可能だと考える。



写真 4,5 学内での献血推進活動

5-2 広報活動他

広報や周知の工夫も重要である。学内での献血活動は事前周知がポスターに限られる。そのため SNS や LINE を通じて、「今日大学に献血車が来ています」と伝え、献血で救われた命のエピソードや動画をリンクさせるといった工夫ができる。また、日本赤十字が発行する「献血 Walker」というフリーペーパーでの記事には平成 30 年「はたちの献血」キャンペーンキャラクター LOVE in Action アンバサダーとして静岡県出身の広瀬すずを起用していた。こうした静岡県の若者にとって馴染みのある有名人やキャラクターを用いて、献血を身近に感じてもらうなど献血に対する「痛い」「怖い」イメージを和らげる広報活動も重要だと考える。加えて、献血をおこなったことある人でも「時間がかかってしまう」ことに不満を感じている人もいた。そのため献血中の環境の快適さ、待ち時間の娯楽、プレゼントの充実もはかることで、若者の献血参加率やイメージ上昇に繋がると考える。

6 地域からの評価

今回ご協力いただいた方や機関である静岡県赤十字血液センター浜松事業所、静岡県健康福祉部薬事課には報告会を2月1日に開催しご意見を伺う。特に途中経過にあつて、献血活動の重要性を認識し、自分たちも献血活動に取り組み、実践したこと、さらに引き続き静岡県内の若者の献血者を増やす活動を継続していく点については、静岡県赤十字血液センター浜松事業所から評価いただき、今後も情報提供にご協力下さるとのことであった。

【主要参考文献・資料】

厚生労働省血液事業 (<http://www.mhlw.go.jp/new-info/kobetu/iyaku/kenketsugo/1b.html>)

『愛のかたち献血』日本赤十字社 平成 29 年 4 月 他多数の日本赤十字社発行の献血活動関連冊子・印刷物

【謝辞】本研究の遂行にあたり多くの関係者、団体、学生にご理解とご協力をいただいた。静岡県赤十字血液センター浜松事業所事業課推進係名倉様、竹内様には献血活動に関する多くの情報を提供していただきました。また静岡県健康福祉部薬事課中西隆の皆様にはアンケート作成に貴重なご助言をいただきました。アンケートに協力してくれた静岡産業大学学生 190 名とインタビューに応じてくださった西部地域で献血活動を推進している学生ボランティアの皆さんに感謝申し上げます。

